廃棄卵殻活用の紙 開発

サムライトレーディング（桶川）

卵殻パウダー配合の紙「カミシェル」で作られた卵トレーと手提げ袋を紹介する桜井裕也社長＝桶川市のサムライトレーディング

食品の輸出や研究開発などを行うサムライトレーディング（桶川市）は、廃棄卵殻のパウダーを配合した紙「カミシェル」を開発し、2月に販売を開始した。廃棄卵殻を有効活用し、二酸化炭素（CO_2）排出量の削減をかなえる新素材として注目を集めている。（山田浩美）

■パルプの代替へ

同社では昨年から卵殻パウダーを配合したプラスチック「プラシェル」を開発し販売。SDGs（持続可能な開発目標）への関心の高まりもあり、ノベルティグッズや社員食堂のトレーなど社内製品に導入する企業が増えている。

桜井裕也社長(50)は「脱プラの潮流で、需要は紙へシフトしている。卵殻パウダーをプラスチックだけでなく、パルプの代替にもできないか」と新たに開発を進めてきた。

共同開発した新生紙パルプ商事（東京都千代田区）と三菱製紙（同墨田区）と「カミシェル」の商標とロゴマークを共同使用し、製造・販売は両社が行う。卵殻パウダーは約10～50%配合し、名刺や手提げ袋、菓子用の箱、緩衝材などに製品化。すでに県内の金融機関などでは名刺にカミシェルを導入し始めている。価格は従来紙とほぼ変わらない。

新生紙は2020年度に8億円の売り上げ、三菱は名刺で60トンの製造を目指している。

■環境保全の事業モデル

同社はもともと食品会社でプリンの製造なども手掛ける。原料の卵の殻を畑の肥料に使うなどの取り組みはしていたが、国内で年間約25トン排出される産業廃棄物の卵殻を活用する方法を模索していた。

環境先進国で進む脱プラの機運もいち早く察知。「海外出張で赴く米国では、プラスチック製のトレーなどはほとんど見かけない。日本にも必ずその波が来る」と確信し、15年から開発に着手。製造メーカーの工場に粉砕装置を設置し、腐食の早い卵殻の内側を処理した上で、工場でパウダー化する生産体制を確立した。

15年に国連でSDGsが採択されたことも追い風になり、同年、食品会社から事業を切り離して現会社を設立。カミシェルの開発では、CO_2削減のビジネスモデルとして1月、県主催の渋沢栄一ビジネス大賞を受賞している。

他企業と協業し、主に中小企業向けにSDGsや環境問題の勉強会も主催。今年は、浮いた産廃費用の一部で植林事業に取り組む活動も企業に呼びかけ実施する予定だ。

桜井社長は「産廃費用としてお金を払ってCO_2を出すのは本末転倒。廃棄卵殻が脱炭素社会につながることを普及させ、カミシェルで25トンの廃棄卵殻をゼロにしたい」と力を込めた。

CO_2と廃棄費用を削減

埼玉経済

企業、団体、商店街などの話題を
TEL 048・795・9161
✉keizai@saitama-np.co.jp